
A real RPG

十冬樹刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A r e a l R P G

【Nコード】

N 3 5 6 2 F

【作者名】

十冬樹刀

【あらすじ】

誰だって子供のころゲームをやっていただろうRPGやアクション。サバイバルホラーにファンタジーこの世界にはない生き物たちがいて、魔法があつて、強力な武器があつて。時たまその世界に行つて見たい。自分もあの英雄のように剣を持って、銃を持って戦いたい。と思ったことがあるはずだ自分も最初はそう思っていた。だけど、実際にそれが実現したらどうなるかなんて考えたことは無かった。でも急にそれは実現してしまった。唐突に。突然に。そこで待っていたものは、楽しさでも嬉しさでも、ましてや感動でもなく

恐怖と悪夢の二重奏。それだけだった

第一章 始まり（前書き）

展開がかなり急&人物の反応が妙な点がありますがそこはご勘弁を・。
・。

第一章 始まり

誰だって子供のころゲームをやっていただろう

RPGやアクション。サバイバルホラーにファンタジー

この世界にはない生き物たちがいて、魔法があつて、強力な武器があつて。

時たまその世界に行つて見たい。自分もあの英雄のように剣を持つて、銃を持って戦いたい。と思ったことがあるはずだ

自分も最初はそう思っていた。

だけど、実際にそれが実現したらどうなるかなんて考えたことは無かった。

でも急にそれは実現してしまった。

唐突に。突然に。

そこで待っていたものは、楽しさでも嬉しさでも、ましてや感動でもなく

恐怖と悪夢の二重奏。それだけだった

「A real RPG」

「ゲームをしよう!」

すべてはその一言から始まった

午前8時38分。青橋高校の2年Bの教室内。だらだらとくだらなく、中身の無い担任のスピーチが続く中その声はスピーチを通して堂々と、緩やかな雰囲気をかもし出している教室を席卷したん・・・?なんだ?

その少年、蒼葉シユウは目を覚まし、緩慢な動作で見尻をこすりながらつぶやいた

睡眠は十分とっていたがシユウはいつでもどこでも眠くなる

家から出た時直した寝癖も先ほどの二度寝のせいで完全に復活をし

ている。

ある程度整った顔立ちをしているが、寝癖&寝ぼけ眼のおかげで台無しだ。

そういえば去年、遅刻（原因は寝坊）で単位を落としそうになった。高校入学1年目から落第なんてシャレにならない

最近はいぶましになったが、やはり退屈な長話を聞いていると眠くなるものだ

頬の辺りには制服のボタンの痕が付いていて、こんな状況でなければみんなに笑われていただろう

だが、そんな事は歯牙にもかけられず、教室内では

「なんだなんだ？」「おいおい・・・放送委員・・・」「だれのいたずらだよ」

などとさまざまな言葉と苦笑が飛び交っていた。その様子を見て安心したシュウは再度つつぶし睡眠の世界に入ろうとした。

そして同時に

ガタンッ！ と何か質量を持ったものが落ちる音が響く

「いつて！」頭を抑えてシュウは叫び、つつぶした状況のまま頭部にぶつかったものをさぐる。以外にシャレにならないものがぶつかったようだ。かなりいたい

たんこぶ程度はできているだろう。投げたやつあとでしばいておくか

ガサガサ・・・おっ、あつたな

手でその物体を握る。

冷たい質感。手で形を確認するとどうやら鍵カッコの片側のような形に少し突起が付いている

持ち上げるとずっしりと重い

思い当たる節が無く、怪訝に眉をひそめながら起き上がる

あたりでは男子も女子も担任までもがざわめいている。なんというか、パニックだ

そしてシュウも自らの手に握られているものを見て息を呑んだ

黒い光沢。金属の重量。わきに置かれたマガジン。

平和な学校。いや平和な日本ではほとんど縁のない物体。

模型やおもちゃなどではない本物しかかもし出せない冷たい気配

これは―偽物ではなく、本物の銃。実銃を持った彼にはなんとなく
わかった

だが、周りの友人達は銃刀法のある日本に本物が出てくるなどはま
ったく思っていないようで、エアガンのように振り回しているやか
らもいる

ずいぶんと唐突な出来事だった。朝の平和な学校に突如流れたスピ
ーチと拳銃

嫌な汗と悪寒が背筋を伝う。なにか普通ではないことが進行してい
る。ということが直感でおぼろげにわかった

始まり

「ルールは簡単！その武器を使ってRPGのように敵を倒していき、
ボスを倒せば君たちの勝ちだ！」

不意に声がする

その声で騒ぎがある程度収まった。

まるで状況は読めないがいわゆる新手の遊びかそれに類するものだ
ろう、TVが番組制作のために我が校を選んだのだ。と納得するも
のもいた

だがいまだ不安そうな顔をしているやからもいたし、なにがなんや
らわからずあたりをきよるきよる見回しているやつもいる

それとは正反対に、「優勝は俺がもらったああああ！！」と色めき
発つ男子達もいた

ずいぶんと単細胞だ・・・

そう思う、シユウは、「どっちでもいい」という少数派だった（3
6分の1）

そしてその声が一番反応した体育会系で腕っ節も強い男子が

「俺が一番のりだっ！」といって扉を豪快に開け放つ

あたりの状況などまったく気にすることはないようだ

恐らく地震とかがあつたら一番最初に死んでいるタイプだろう
冷静に「まちなさい！」と静止する担任はもちろんガン無視である
銃をテレビの見よう見まねで構えながら廊下に躍り出る

すると彼はあたりを見回し、「すげえ・・・」と何故か感慨深そうに
もらした

シユウはその言葉をまったく無視して、銃をあぶねえ持ち方してる
なあ・・・と実射した者の意見を述べていた。

だが別に注意することでもなかったのになにも言わなかったが

「おい！まてよ！」あとから続いてその仲間達彼の後を追う。どの
人間も半笑いで、楽しそうにしているお気楽な部類の人間だ

前例と同じように一瞬驚いていたがすぐに走り出し、止めるまもな
く扉をとおりぬけ先頭に追いつく

タンタンタンと廊下を駆ける足音だけが妙に響いていた。

それ以外はやけに静かだ。どうやらまだ主催者の言う、敵とやらの
姿の見えない

べつにこの様子だったらなんもなくおわるかなー

と樂觀視していたシユウだったが次の光景を見てそんなことはいえ
なくなつた

唐突に先頭の男子の横の部屋から緑でゲル状の鞭のようなものが飛
来した。それほどの長さも無く、速度も頑張ればかわせる程度のも
のだったが、油断していた彼にそれはかわせるはずもなかった
見る間にその本体があるであろう教室に連れ込まれていく。

地面を引っかいてかすかな抵抗を続けるが、突起の無いタイルの廊
下ではあまり意味をなさなかった

「ぐっ！うわあああああああ」

むなしい叫び声がこだまし、パンパンツ！という銃声が響く
連れの2人も銃に手をかけているが、誤射が怖いのか、恐怖で身が
すくんでいるのか動けないでいる

ここからはその教室は見えないため中の状況はよく分からない。だ

が生々しい音だけは聞こえてくる

ザグッ ベキッ メキメキ ズシャ！ どれも不穏な擬音。中で起きていたことは何かは分からない。が無事である光景はまったく浮かばない

血の気が引く。教室の中は真っ青な顔が33つ並んでいて、だれもが絶句していた

扉の橋から赤い血が漏れ出しているのが見える。どす黒い血は白い廊下をだんだんと侵食していく。

足元に広がっていく赤を見て近くの2人は「ヒッ」と恐怖に引きつった声を上げた

見ているほうも怖い、当事者の恐怖と比べれば比例にならないほど生易しいものだろう

あの状況に置かれれば少なからず、みな恐怖に震えるはずだ動けずにいる片方の男子の足元を緑の鞭が掠めた。

足の支えを失って、地面に後頭部をぶつける。

気絶でもしたのだろうか。今度は抵抗も無く伸びた状態で引きずられていく。

やっと我に返った最後の一人はダッシュをしてこちらにもどってくる表情は必死という言葉がもつともよく似合いそうな感じだがその割には走るのが遅い

先ほどよりシンプルにメシャグシャッ！という音がした

それから数秒置いてにベタンベタンとぬれたもので地面を叩く音がある

見慣れた廊下の奥に目を凝らすとそこには、生物的嫌悪を抱かせる生命体が一つあった

形はまだ人型をしているが表面は数センチほど緑のゲル状のものに覆われており、目の部分はうつろにくぼんでいる。内部はバイオハザードのゾンビのようにぼろぼろで腐敗しかけた人間のようなものが漂っている

もし作れといわれたなら、ラクーンシティまで行き、ゾンビ捕獲し

て頭部から特殊なゲルをかけ、発酵させればあんな感じになるかも知れない

もちろんいくらもらっても作る気はさらさらないが

その姿を見た瞬間爆発的な悲鳴が狭い教室内で渦巻いた

大半の人間はパニックになり窓際やドアからなるべく離れた位置に我先に移動する

校則を違反して持ち込んだ携帯を取り出し、110をブッシュする人間も多い。

だが、電波が遮断されているのだろうか。いつまでたっても電話は反応しない。

ちっ！逃げるのを援護してやるっていう選択肢はこいつらにはないのかっ！

シウウは舌打ちをすると、みなとは反対に自らの机の上においてあったポーチと2つマガジン、そして恐らくはソーコムMk23と思われるハンドガンをつかみドア付近まで近寄った。昔の癖だろうか。勝手に体が動いていた

ポーチをあけ中身を確認する。するとそれはバラの弾をつめたものだった

ドアを開け、ソーコムにマガジンを挿入し、いつでも発砲できるよう準備を整える

あの生き物・・・いや、物体に銃などはきくのだろうか

という思考が幾度も脳を掠める

脂汗が額をつたった。

その間にも必死に廊下を走り最後の一人である彼はこちらにもどろうとしている

だが、極度の恐怖で足がもつれ転んでしまった

背後20mほどにはその化け物が迫ってきている。

ぱっと見ゾンビに似ているが動きはそれほどゆっくりとしたものではない。

歩いた後にはその体の水分で足跡ができている。それはさまざまな

形をしていて、決まった形などはないようだ

心を決めて銃を持ちなおし、体勢を整える

つばを飲む音が脳内でゴクリと反響した

シユウは狙いを定め、トリガーを引く。誤射や跳弾の危険性がな
どといっている場合などではない。撃たなくても彼は数秒後に死ぬ。
それならば撃ったほうがまだ

バンツバンツ！と45口径強化弾が放たれる。

銃弾は見事にその化け物を捕らえる。一発目は肩。二発目は腹部で
ある

緑のゲル状の物が吹き飛び、あたりに張り付いた。

そしてその部分には恐らく本体であろう内部の黒い人型が露出する
たが、痛みやダメージはないらしく、多少のけぞっただけでまたそ
の足を引きずるようにして進んでいく

ちっ、やはり動物や人を撃つ様にうまくはいかないのか・・・

苦々しく顔をゆがめながらも間髪いれずに再びトリガーを引く。

1, 2, 3, 4発と胸と胴体に命中。3発はばらばらのところに命
中し、ビシャっと言う音と共に緑のゲルをはいだ。ただ、最後の一
発は先ほど着弾した右腹部に命中。

するとその部分がひび割れ、瓦解した。

ぼろぼろと黒い粉が地面にまかれ、化け物は自らの手のようなもの
で、砕けたところを抑え、これ以上の被害の拡大を防ごうとした。
どうやらゲルは武器の役割とアーマーの役割を担っているようだ。

内部はそれほど固くなく、銃弾でも破壊できる材質らしい。

ずいぶんと簡単だな。と唇をゆがめ心の中でつぶやく

だが、ほくそ笑んでいる間にゲルがその割れた部分に入り込み、黒
く変色したかと思うと、先ほどの黒い本体に変化した。どうやら自
己再生機能があるようだ

だが、倒し方が分かればこれほど楽なものはない。

銃撃音にびびっているクラスメイトと、腰を抜かして倒れている男
子生徒をまったく気にせずマガジンの中身を容赦なく全弾叩き込む

胴体部をねらって放たれた残弾9発緑の装甲を豪快にばら撒き、胴を砕き、上半身と下半身を分離させた。

だが、まだ生命活動を止める様子は無く、匍匐前進の要領で前へと進んでいる

腰を抜かした男子が手の力だけで必死に後ろへ下がっている

ん？なんだ・・・？

シユウは目を凝らす。砕けた上半身の下の部分になにか赤く光るものが付いている

それは明らかに周囲の破片とは違い、どこか生命の名残を持っているような気がした

空になったマガジンを落とし、もう一つのマガジンを挿入する

ためにねらって数発撃ってみた

小さく、距離もある程度あるためすぐには当たらなかったが、3発目でその塊に強化弾が命中

パキンッ！という小気味よい音を立て、それが四散した。それと同時にしぶとく生き残っていた怪物は、まるで瞬間凍結されたかのように固まり、表面のゲル状の物が蒸発する

そして水分がなくなると同時にミイラのようになり、地面に落下、粉塵のように砕けると、どこからか吹いた風によってさらわれていった

そしてその生物の存在を記すものは何も無くなり、同時に廊下に倒れていた男子の死体さえも姿を消した

重苦しい沈黙。しかしそれを打ち破るように、

「あー大切なこと言い忘れてましたけど敵から攻撃食らうと実際に血とかでますんで。下手するとしにますよー。あ、でもゲームがあなた方の勝ちで終われば死んだ方々は生き返りますんで。死ぬのが嫌な方は教室でじっとして下さい。教室は一旦でるともう二度と入れないけど教室内には敵はいってこれませんからねー」

まったくもって大切なことを言い忘れていたものである。

教室内の人間はほっと息をつき、一時的な安堵を得たと同時に額に

大粒の冷や汗をながした。

だが、対照的に外でしりもちをついていた男子生徒だけは絶望的な表情で聞いている。

「ただ、このゲーム。72時間以内にクリアしないとあなた方の負けです。負けるとランダムにこの中の2分の1の人間が死んで、ゲームで敵に殺された方々も生き返りませんよ」。でわ頑張ってくださいー。まったねー」

それだけ言い切るとプツンと放送は途切れ先ほどの静寂がもどる全員が絶句した。戦って、このゲームに正々堂々と挑めば全員が生き残るか全員が死ぬかの選択がまっており、戦わずに放棄すれば自分の人間は生き残るが残りの半分はランダムに死ぬということ生き残るか否かは運しだいというわけだだが、少なくとも半数は生き残れる。

どちらがよいのかは分からない。どちらを選ぶべきか とみなが思案顔にくれる

もちろんシュウもその一人だったが、意気消沈した教室の中。

だがその空気をまるで砕くかのように

「俺はいくぜ。戦わなくても死ぬ可能性があるなら戦って死んで悔やんだほうがマシだからな。それに勝てばあいつらだって生き返る。」

堂々とそれだけ言う短髪で見るからに体育会系です。という少年、怜が自らの机の上の日本刀を引っつかみ立ち上がった。

銀の刀身が蛍光灯の光を浴びて白くあでやかな輝きを放つ

「あいつらを、仲間を助きたいやつは一緒に来てくれ」

怜は辺りをにらむがだれもがうつむいていて反応すらない

眉をひそめると、日本刀を腰にさし、あからさまにいかった様子で机を強引にどかしながら進んでいく。

はぁ・・・いつも通り前後のことまったく考えず突っ込むよなぁ・・・あいつは

シユウは中学校のころからの親友の熱い顔を見て、はあと小さく息をつき小さく微笑んだ

この性格のせいでなんと大変な目にあつたことか

「まあ待て」

教室から出て行こうとする怜をシユウが引き止める

怜はキツとシユウをにらみつけ反発するように

「止めても無駄だ。俺は行く。なにもしないで死にたくは無いからな。他のヤツらが臆病者なんだ。俺がやるしかないだろう」

とあからさまに憤った様子でいった

シユウはため息をつき

「空の弾装に弾をつめるまでまってくれ。バラの弾を15個もつめるのはなかなかどうしても時間がかかるものだ」

と、どこかの軍人のように偉そうな口調でいった

それを聞くと怜は少し呆けた顔をしていたが、言葉の意味が理解できたあとは唇を吊り上げて、

「やっぱお前はかわらねーな。まってやるよ。もちろんな」

と微笑んでいった。

「お前ももかわらねーって」

ふふつとシユウも微笑む。

手元のポーチから無造作に弾をひっつかみ机の上にばら撒く。

いくつかが転がりころころと転がり床に落ちた。

おっともつたいないな

拾おうとしたが、かがんであたりを眺めた時には痕跡も無く消滅し

ていて、一つも見つからなかった

うつ・・・やってしまった・・・

貴重な弾を無駄にした。という感覚があつた。もういちど欠けた分を取り出すにはすこし抵抗があつたが、戦いの際に弾が切れたら命にかかわるのでそんな事を言つてはいられない。

再度ポーチを開く。するとそこには先ほどと同じ量の弾が詰められていた

これは・・・まさか通常装備の弾数は無限とか言うあれなのか？
シユウはその不自然な現象に首をすこしかしげたが、「ゲームをしよう！」といていた彼の言葉を思い出し、なぜか妙に納得してしまった

これはゲーム。そう、ゲームなのだ。自らの命を掛け金にしたずいぶんと悪質なゲーム

空のマガジンをもう一度眺める

さて、この空の弾装に弾を込めたらゲームの開始だろうか。俺たちの生きるか死ぬかを決める最悪で最低なゲームの

第一章 始まり（後書き）

こんな素人の作品を読んただきまことにありがとうございます。もし気に入ったのならば、続編も読んでいただけることを願っています（なんかどっかの宣伝みたいになってしまった・・・）

遭遇（前書き）

ええと・・・これかいてるときは（自分に）いろいろハプニングあったので多少雑です・・・すみません

遭遇

シュウと怜は弾をつめ終えたあと、すぐに教室の前方にある扉から廊下へと出た。

すこしもたついたせいで3分も時間を食ってしまったが怜が何も言わなかったのでまあいいのだろう。

だれかが引きとめようとしていた気もするがそんなもの程度であきらめるつもりはない

上でいつでも明るく光っている蛍光灯。それを薄く反射する白の壁。ほのかに肌色がかって、場所によって割れているタイル。

教室からでるまではどこにでもある普通の学校に見えていた。教室からでるまでは

教室から出た二人が見たものは極端に長い廊下と、それに比例するように増えた蛍光灯。

横幅も普通の3倍はあり、多少短くていいのならばシャトルランだってできる幅

それに、いまいるA棟の4階には部屋は10つしかないはず。

だが、一つの廊下を見ただけで分かる。あきらかに異常な量の部屋、部屋、部屋だ

まるで電車のドアのような間隔で見慣れた扉が設置されている

「これは・・・」

怜があたりを見回して驚く。驚いて後ずさりしながらも、もう教室にもどれないということを思い出して踏みとどまっていた

深呼吸をして怜は近くの窓に近寄り、外の状況を見回す。

「んー外は大丈夫みたいだな。天気もよくて富士山も見えるし」

唯一まともなものをみて、怜はすこし表情を緩める

だがシュウは少し考え

「この階って目の前のビルが邪魔になって富士山は見えないんじゃないかって・・・」

とボソツとつぶやき、自らも窓に近寄って下を眺める
あたりを同じように眺める。

なんだ普通だ。外はどうにもなっていないみたいだな。富士山なんて
細かいことを気にした俺が馬鹿だった
と胸をなでおろす。

が、下を見たときそれは急変した
真下に見えるのは小さな木々。苗木などではない。開校当時から植
えられている50年以上たっている成木だ

そのはずなのにここから見える成木はまるで単三電池のように小さい
まさか……

「階層が……増えてる？」

震える声が勝手に口から漏れた。

怜を見やると、目を白黒させていた。多分自分も同じような顔をし
ているだろうと思う。そして少し遅れてうなずいた

「とりあえず下にいつてみよう。そうすれば何か手がかりがあるか
もしれないし」

シユウはとりあえず当分の目的として提案する。

下に行けば公衆電話かなにかのまだ断絶されていない連絡手段があ
るかもしれない。

そこから陸自にでも電話をすれば、正々堂々では無いかもしれない
が楽にゲームには勝てるだろう

怜を見やり、同意を求める。

もちろん怜は当たり前のようにうなずく

「じゃあ階段でも探すか」

というと、怜はなぜかきよろきよろあたりを見回し始める

シユウが不思議そうにながめていると、すぐに通路の奥の右を指差
して

「階段つてあれじゃね？」

予想外の言葉が飛び出す。振り返って奥を眺めるとそこには堂々と
階段があった。

階段の入口が小さくなっていて見にくかったが、意外にも安易にそれは見つかった

「ふ・・・ふふはは。じゃあ行こうか」

派手な設計の割にはずいぶんと手抜きなオブジェクトの配置に小さな笑いが漏れる。

この様子ならさっさと抜け出せそうだ。

笑いと共に楽観主義の一部が再び顔をのぞかせた。それを見て、怜が「・・・はあ」と浅いため息をついた

「じゃあ、まあさっさとさっさと」

怜がシュウをせかす

下はタイル張りだが、はいているものが上履きなので大きな足音はしない。

それでも静かな廊下には目立っている。

前衛が刀を持った怜、後衛がMk-23を持ったシュウである

階段までの距離はおおよそ200mくらいしかなく普通に歩けば10分くらいで付きそうだが、警戒して芋虫が這うような速度で進んだため、倍の20分ほどもかかってしまった

「これ・・・か？」

目の前に階段を目にしたシュウがつぶやく

ぱっと見は階段のそれで普通に下りられそうだが何か違和感があった

「なんかおかしくないか？」

怜も同意見だったようだ。どこかは分からないが、こう、なんというか、えもいわれぬ嫌な予感がする。直感言うやつだろうか

ベチャリ

どこかで30分ほどくらい前に聞いたような音が響いた。

前回この音を聞いた時は2人の友人が殺されている。

はっとして、振り返り左右を見回す。

だが敵影はまったく無い。心配して上下も見てみるがやはりいなかった

再度ベチャリという音。今度はもっと近い

あせりが心の中をかき乱す。答えを導き出そうとするも、ヒントどころか、問題文すらない問題を解けるわけが無い

「とりあえず階段を下ろう！」

そついい、シュウは階段を下りるモーションをして――

豪快に頭をぶつけ派手に地面にしりもちをついた

どうやら目の前に見える空間は現実にあるようでないようだ

いわゆるホログラフや幻といったようなものだろう。さすがだ。手が込んでいる

シュウは顔をしかめながら頭をさする。たんこぶにはなっていないが少しはれていた

そして再び足音。音源はわかるようでわからない

怜はしりもちをついて痛がるシュウを横目に、階段の姿をした壁の表面を指でなぞる

大理石のようにつるつるした表面。冷たい質感。その壁はどこまでも平らだった

先ほどシュウがぶつかった一点を除いて

「まさか・・・」

怜が少し惑いながらも壁に向けて刀を振るう。

刀身の先端部が貫通してめり込む

何も知らない人間が見れば、突然刀が消失したように見えただろう柄を強く握り、全体重をかけ空間を引き裂く。刀が折れないか心配だったが、どうやら見た目以上に刀身は硬く、タフなようだ。

ギシギシというよくわからない音がして、どんどん刃が進んでいく

「はっ！」

気合を入れて一気にあまつた力を叩きつける

ブリッという音がよくあいそうな勢いで空間が裂ける

空間を切り裂いた刀は勢い余ってシュウの目の前なのタイルを粉碎して止まった。

「おおっ・・・やるな」

すこし冷や汗をかきながら、飛び跳ねるように起き上がる

「げっ……」

怜は冷や汗をかきながら少しずつ後ずさる

初めは状況が読めず、不思議な顔で見ていたが、空間の裂け目を見たとき、表情が変わった。

細く裂けた隙間から見える影。それはだれしもが生理的に拒絶しそうな毒々しい緑。

シユウは裂け目の真正面に立ち、姿を確認しようとする

ん？ 案外小さいな

それが最初の感想。

確かに隙間から見える影は小さかった。高さしか分らないが、大きく見積もっても80cmくらいの高さだ。

細部は……まだ分らない。もうすこし大きい裂け目を作って欲しかったが、贅沢はいえない。

シユウはさつさと始末をつけようと、足を開きMk23を構える

銃身が黒光りして、それと同時に何かがモーシヨンを見せた。

直感が何か危険だ。と必死に告げる

やばい。何か来る

「とべっ……！」

シユウは叫ぶと同時に野球のヘッドスライディングの要領で、できるであろう傷も気にせず右に飛び込む

怜もコンマ数秒反応が遅れたが、ぎりぎりのタイミングで左に飛んだ同時に階段の幻が内側からはせた。

四散したコンクリートのようなものの欠片が散弾となって先ほどまで2人がいたところに降り注いだ

そしてそこから堂々と姿を現したもの

確かにぱつと見高さはない。だが、問題はその形状だった。

たとえるなら……鉄でできた足が4本のクモ……といったところだろうか

手だが足だか分らないが、巨大なつめのようなものが4本体についていて、中心部の楕円形の体を支えている。盾のような役割も担

っており、体のほとんどの部分がそのつめに覆われている。
上から見ると平べったく曲線でできた三角錐のような形に見えるだ
ろう。

そこにラグビーボールのような頭がついていて、その上に2つくる
みのような目が乗っている。首は無いが、頭は固定されているよう
ではなく、もののけ姫の木霊のように頭をカクカクと壊れたモータ
ーのように動かしている。

だがもちろん木霊のような愛嬌はない

不規則に左右に揺れる頭部が右、シユウの方向を向こうとする。

無理な体勢のままシユウはMk23のトリガーを引き絞る

ガイッ！という音がして首が一回転した。だがそれだけだ。

怯みも、恐れもせずに頭を動かしてこちらを向く。

とてつもなく頑丈な頭部だ

黒い暗黒の目がシユウを数秒じつと眺める。

膠着した時間。

だがその生命体が4本の足をガシャガシャと動かしこちらを向いた
ことでその膠着は簡単に瓦解した。

シユウは即座にMk23を乱射、怜は危険もかまわず間合いを一気
につめる

カンカンッ！とむなしい音が何回も響いて、硬い爪と頭部に銃弾を
はじかれる

爪は多少削られているが壊すにしてもその道のりは長そうだ。そし
て頭部にはまったく損傷はない。

鉄のクモが加速し、爪が届く範囲まで間合いをつめる。

上半身をのけぞらせ、攻撃のモーションを取る。表面が全身鎧のよ
うになっているせいか、鈍いとまではいれないが動きに俊敏さはな
い。

普通の反射神経を持っていればゆうに逃げ切れる速度だ。

だが、威力はすさまじかった。

小さな地響きがして、前の爪2本が地面にめり込む。

クモが足を上げると、そこには直径15cmはあり、深さは人の拳が楽に入るほどの大きさだった。

「うおっ・・・やべえ」

冷や汗が頬をつたう。あの一撃にあつたら恐らく、いや99%生きていないだろう。そして死んだとしてもまともな形で死ねるかどうか。

下手をすると赤い肉塊になってしましそうだ・・・

「やあっ！」

クモの背後から怜が刀を振り下ろす。

太目の刀身が爪と直撃。澄んだ音がして、鋭いはずの刃がはじかれる。

だが、さすがは匠の技で作られた刀だ。はじかれても、頑丈な爪に縦に長い傷を残している。

あの日本刀ならすぐに、とはいかないが、ヒット&アウェイで戦えばいつかは倒せるだろう

刀傷をつけた不届き物を始末しようとクモが足をガシャガシャ言わせて反対を向こうとする

「お前の相手は俺がしてやるさ！」

顔に向けてMk23の弾装の残りを乱射。といつても3発しか残っていないく、おおよそ乱射と呼べるような物ではなかったが

「怜！俺がおとりになるから背後からどんどん斬れ！」

右にステップを踏んで攻撃を避けながら怜に向かって伝える
空の弾装を落とし、上着のポケットにいれ、新しい弾装を抜き出し装填する

「おう！死ぬなよ！」

そついうと怜は間合いをつめ、防御も気にせず刀を振るう。
避ける。斬る。おとりになるためにトリガーを引く。避ける
同じことの繰り返し。

簡単そうだが連携がなっている2人だからできたこと。気心が分かった相手とでないといけない動きだ。

どんどんと傷はましていき、あと数回きりつければ爪が破壊できるだろう。そうすれば中の本体に鉛玉をぶち込むことができそうだと思うたときだった。

「ん・・・？」

急にクモが硬直する。

怜は怪訝にクモ見て、間合いを取ったが、シュウはそれを好機と見て、空の弾装を取り出し、ポーチの弾をつめ始める。握って出した弾の数発が足元に落ちるが気にせずリロードを続ける。ちょうど弾が切れそうになっていたときだった。ラッキー　と心の中でつぶやいた。

数秒して硬直したクモの表面の色がビキビキッ！と奇妙な音を立てて変色する。

爪と表皮が岩石のような灰色に変わり、でこぼこになる。

体が収縮して一回り小さくなり、稼動部が小さくなるが、その代わりに防御に徹する姿に変化した。さすがにやばいと思ってシュウも後ろに下がる。装填するのも終わったところだ。ちょうどいい。

「どうするよこれ・・・」

「いや・・・ちよつと様子を見てみるか？」

そんな会話をしている時だった

地面と岩石と化したクモのわずかな隙間から緑色と黒の液体が広がり始めた。

「体液・・・？死んだのか？」

警戒を解かずシュウがつぶやく

「それは無いだろう。そんなやわならとっくに殺してるさ」
「だろうな」

軽口を叩きながらも2人の表情はかんばしくなかった。大きな水溜りのようになるとそこで池は拡大をやめた。シュウがなにかを感じてMk23を構える。

同時に緑の池が消え、代わりにその場に成人男性ほどの大きさの人

型が4つほど立ち上がった。

緑の表皮に黒い体。黒く丸い目に、空洞のように開いた口
げっ・・初めに見たあのゾンビもどぎっ・・・

一瞬怯むが、先手必勝だと思い鉛玉を撃ち込む

右側の一体に6発ほど撃つ。

案外簡単に一体の上半身と下半身が分離した

このゲームのなかでは意外と弱い部類に入るのかもしれない

赤い核をかかと落として粉碎する。ガラスの球を砕いたような感覚
がして当たりに粉塵が立ち込める

横からゲル状の物が伸びてくる。

体をひねって急に伸びた腕をすばやく避ける

できた隙を見逃さずタックルをかます。感触がすこし、いやかなり
気持ち悪かったが効果はあった

緑の体が吹っ飛び、後ろの敵を巻き込んで地面を転がり怜の足元に
転がった

怜は見越していたのか、介錯人よろしく振り上げていた刀で2体の
胴を真つ二つに裂く。

胴が切り離されると同時に核と思われる部分も粉碎されたのだろう
か、その場に固まり、粉塵と化して散る

残った二体がいきおいよくシュウに迫る。

近いほうの頭部を回し蹴りの要領で蹴り飛ばし、後続の目から自分
の姿を隠すのに使う

それと同時に残りの一体に息がかかりそうな至近距離まで近寄る
目を凝らすとわずかに赤い光が見える

緑のゲルの中にMk23をゲルが付くのも気にせずねじ込む。光る
塊の位置に銃口を突き付けて連射。

胸をうちぬかれたゾンビもどきは背後に1mほど後ずさると足元か
ら消えていき、跡形も無く消滅した。

「さて、本体にとどめをつ！」

「もちろん！」

全力で走り、一気に距離をつめる。

だが数m進んだところで足元に違和感を感じて2人とも立ち止まる。こんなに滑ったか？廊下って

シユウは足元を見てうつ・・・と声を漏らす。再度緑の粘液の池が拡大を始めていた

距離をとるまもなく、一気に足元が盛り上がった。

足を取られ、受け身を取るまもなく廊下に背中を打ち付ける。一瞬息が詰まった

そのまま地面を転がって息を吐きたいところだったが、恐らくそれでは殺されてしまう

倒れたままトリガーを引く。

熱を持った空薬莢が舞い、頬に当たって軽度のやけどを作るが気にしない

すぐそばの一体が距離をとったのを確認すると体をばねのようにして立ち上がり、下がる

「さっきと同じ要領でしま・・・っ・・・」

そこまで言い怜の口調のトーンが一気に下がった。

何かと思い、わずかに浮いた涙を払い視界を確保する

そこにいたのは8体の人型。先ほどの倍だ

一体一体なら簡単に対応できるとは言え、これだけの数。人海戦術でこられたらどうしようもない

「ちつくしょう!!」

一気に駆け、怜が敵を一閃する。戦闘の一体は袈裟に着られ、崩れ落ちる

だがその後の敵までは届かなかったようで、形が不定の拳を放ってきた

「ぐふっ」

苦しそうな声を上げ廊下を数m転がる

「怜!!」

シユウは助けに行こうと足を前に出すが、それを阻むかのように4

つの人影が迫ってくる

「どけええっ！！！」

Mk23を連射する。怒りに任せて引いた弾丸だが狙いはかなり性格で前方の2体の敵が消滅した。

だが快進撃もそれまで。スライドが下がりきり、弾がない事を示す。
「つつくしよう！」

マガジンを落とし、新しい弾装を装填しようとしたところで異変に
きずいた

なんだ・・・！？銃が内側から光ってる！？

手にもったMk23の内部から白い光が漏れ出している。

シウは手を放し、放ろうとするがまるで銃と手が接着されたように離れない。

危険を察知する能力があるのかどうかは分からないが敵も攻撃をやめ、後ずさった。

険しい表情をしながら眺めていると、光はだんだん増していき、ついには目を開けられないほどの明るさになり、その場にいる人と、異形の物が目を（あるのかは分からないが）閉じた。

こんなところでっ・・・！しかもよりによって武器の自爆なんかでしぬのかっ！！！！

そんな思いが脳裏をよぎった。

遭遇（後書き）

ええと・・・前回と似たような文句ですが見てくださり本当にありがとうございます！

これからもよろしくお願いします

それといまさらですがジャンルが「学園」だったのを「冒険」に変更しました。

どこを探しても学園物の気が見えないので・・・

進化

だがいつまでたっても衝撃や爆発は来なかった

自分の思い違いだったのか・・・？ シュウは警戒しながらも目を薄く開く

目の前に広がっていたのは先ほどと同じ廊下―ではなく真っ白な世界だった

なにも、だれもない。まるで真っ白な本のページの中に迷い込んでしまったみたいだった

「え？あ？どこだよここ」

びっくりしてきよるきよるとあたりを見回す。だが白い壁と白い天井以外にはまったく持つて見当たらない

何が起きたんだ・・・ シュウがそうつぶやきかけそうになったとき背後から

「おめでとぅ」

と軽い声が響いた。ここ最近どこかで聞いたことのある声だ。

はつとして背後を振り返る。だが背後には誰もいない。とりあえず無事だったソーコムk23を構えながらあたりを警戒する。

そういえばさきほどほとんどの弾をつかってしまった。リロードしようと思つて弾装を落とすが何故か中には弾がキツチリ15発詰まっていた

・・・なんでだ？疑問に思つたが現在はこの状況を打破するのが先決だ。

声が出たほうを更に入念にしらべる。足元の床が白い半透明な床だったのだから歩きけるかどうか心配だったが、杞憂だったようだ。畏などはない。

一歩また一歩と進んでいく。だが人影らしきものどころか動物や無機物すらこの空間には存在していなかった

「せっかく君のレベルアップを祝つてあげてるのにその対応は無い

だろう？ひどいなー」

再度声。今度は更に近い。混乱して四方八方に銃を向ける。こんな状況で思っのもなんだがこれをはたから見ればかなりこっけいな光景だっただろう

「どこにいる！？」馬鹿にされている気分がして気持ちがいらいっていたのだろうか、予想以上に大きな声で叫んでしまった

「うしろ・・・さっ」

右足を軸にコンマ数秒で体の方向を変える。自分でもこんなに早く体勢を歸られたのは意外だった。

するとそこには、一人の男性がいた。年齢は・・・恐らく20代前半くらいだろう。髪はぼさぼさで、来ている服もまったくオシャレというものを気にかけていない様子だ。そして目の位置には上着のフードがかかっていて顔はよくわからない

異常ではないが、ずいぶんと変わった人だな・・・それが第一印象だった。

すこし怯みながらも

「ここはどこだ。」と銃を相手の額の位置に突きつけて問う。

ヤツまでの距離はおおよそ5mこの距離ならはずしはしない

「ふうん？確かに度胸はいいね。対応もそこそこ悪くは無い。あの人が期待する理由がわかるかもねー」

男は顎を手でなでながらなにやらまったく分からないことをつぶやいた。

「質問に答える。撃つぞ」

グリップを握りなおし、冷徹に聞く。このまま変な行動をつづけるなら本当に撃とうと思っていた。

どうみても相手はこの状況を知っている、または作っている張本人であり、ヤツを倒せばここから逃れられる可能性もなきしもあらずだからだ。

「じゃあ・・・撃ってみなよ」

ニヤリとローブのしたの唇をゆがめそういうと、腰を落としファイ

ンディングポーズを作る。

わずかに頭の中で思考が駆け巡ったが、一瞬で決断した。
指に力を入れ、トリガーを引き絞る。

黒く空いた銃口から鉛色の弾が吐き出される―はずだった。

だが何回引いても弾は発射されない。それどころか、Mk23の方が逆に瓦解してきている。

はがれた部分は白や黒の粒子となり虚空にとけさっていった。

「へえ……ほんとに撃つとは。判断が早いね。すごいすごい。」
へらへらと相手が口だけで笑う。拍手もしているがやる気が無いように、音はなっていない。

驚きだ。なぜ唯一の武器が掻き消えるのか。

ポーカーフェイスでそのままの体勢のままたたずんでいるシユウの姿からは読み取れないが心の中では、彼は驚きに目を見開いていた

「そんなポーカーフェイスじゃなくていいからさあ。どうせ内心驚いてるんでしょ？」

へらへらしながらもしっかりと心の穴を付いてくる

くそっ……読まれてる

分かりやすい表情を出した覚えは無いが……。やはりなれないハツタリをかましたのがいけなかったか。

くっ……奥歯をかみ締め手を腰ために構える。せめてもの抵抗を止めすためだ。

だが

「あはは。そんなにびびらなくなつて大丈夫だつて。自分の右手の周りみてみな」

と軽く返される

言われたとおりにするのは尺だったが、ほかにどうしようもない。

それに右手を見る程度で自身に被害が及ぶようなことがおこると思えないし

グーにしてしっかりと握っていた手を開き眺める。

なんの変哲も無い手だ。あせりのせいで多少脂汗が浮いているが別

にどうってことはない
そう思ったときだった。

指の先から手首の辺りまでが急に白や黒の粒子、さつき武器が瓦解した時に発生した粒子に包まれる。

それらは踊るようにして流れていきながら、だんだんと濃度を増していく。

初めはタバコの煙ほどのゆらゆらとした不明確なものだったが、今ではもう絵の具の原液のように明確な色を持っている。

「なっ・・・！？なにをしたんだ！？」

あせりながらも聞くが返答は無い。ただその場に薄笑いを浮かべて男はたたずんでいる

その間にも粒子は手の先を離れ、空間に新たな形を形成していく
少しずつ色が混ざったり分かれたりしていき細部の色彩をあらわに
していく。

形は・・・いまだ不明確でよく分からない。が簡単に説明するとグ
リップのようなものが2つについて先端は突起になっている

「ふうん？やっぱ君は銃系統の兵器を形成するんだね。銃か・・・
旅人さんを思い出すなあ・・・。」

感慨深そうに息を漏らす。

あからさまに怪しい人化している。問いただして情報の一つでもほ
しいところだが、今はそれどころではない。

現に状況はどんどんと変化している。まあ主にシウウの手の部分で
だけだが。

薄く回りに広がっていた粒子が一気に手に収縮する。

ぬめぬめと流動する水銀のような粒子はだんだんと鉄の質感を帯び
ていき、細部を形作る。

キンツ！という音があった。

それと同時に手の上に無骨な鉄の塊が鎮座した。

俗にアサルトライフルといわれ、銃の系統の中でも大きな破壊力を
誇る種類のものである

形は・・・アメリカ海軍で使われているSIG556と自衛隊の89式小銃を足して÷2にしたような形だ。

ただ、大きさは従来のもものよりも一回り多く、表面には装甲のようなものが付いていてより武器としての存在感を強くさせる。前方にグリップのように着いているマガジンは分厚く、多くの銃弾が入っていると思像できた。

「これ・・・は？」

独り言のようにつぶやくとそれに反応して男が

「それが君の武器・・・さ。レベルアップすると武器がかわるんだよー。」

だからさつき「おめでとう」とか言っていたのか。やっと理由がわかった

「じゃーがんばってね。これからもいろいろ大変だろうケド。」

手を振りながら男はだんだんと空間の奥に進んでいく。

「あつ！追い待てよ！まだ聞きたいことがたくさん・・・」

そっくりかけ、足を進める。

だが急に目の前に闇が広がった・・・

「うつらあああつ！！！」

怒声とも叫び声とも取れる声が近くで響いた。はっとして目を開け、体を持ち上げる。

声の方向を向くと怜が刀を振り上げその場で緑の人型を叩ききっているのが見えた

後続からの攻撃を避けるためだろうか。攻撃をした後はステップで距離を置いている

「くっそ・・・きついな・・・」

そんな声がため息と共に聞こえた。

「うつ・・・？」

辺りを確認する。白いタイルに薄汚れた壁の、先ほどまでいた廊下だった

あの世界は・・・幻か？こんなところで俺は夢でもみたのか？
ぼそぼそとつぶやき辺りを再度見回す。

怜はシュウの声に反応し振り返た

「おお・・・気が付いたか。」

振り返った怜の顔には疲労のたまった表情が浮かんでいた。腕や足には緑の液体状のものが付いていた。そして顔や腕などには青あざがくつきりと表れている。

なんというか、満身創痍だった

それもそうだろう。一人でシュウを守りながらあれだけの敵と戦っていたのだ。ダメージを負っていないほうがおかしい

「おい・・・大丈夫かお前！？」

疲れきった相棒にあせってシュウが聞く。

「いや・・・きつついな・・・。さっさと撤退するべきだろうな。
倒しても倒してもきりが無い」

げほげほと息を吐きながら怜が言った。背後には十数体の人型が控えていた。

「それと・・・お前その武器どうしたんだ？」

「え？」

怜がシュウの手元を指差す。そこには大きな鉄の塊が抱かれるようにしてもたれていた。

形はアメリカ海軍で使われているSIG556と自衛隊の89式小銃を足して÷2にしたような・・・ってこれはあの時の

そのアサルトライフルの細部を確認する。どうやらあの時のものとまったく同じもののようだ。

怜の背後の人だかりがじりじりと動き出す。

勘案材料はまだまだたくさんあった。それに今も一つ増えた。だが残念なことにそれをしっかりと考えさせてもらえるような時間はまだもらえないようだ

「怜！ここは俺がひきつけるから先にさがってに下りるための道を！」

背後の怜に呼びかける。

怜は苦渋の表情を浮かべたが、自らの体力では足手まといになると判断し

「っ・・・わかった。見つけたら呼びに来るからそれまで死ぬんじやねえぞ!!!」

怜はそれだけ言うで一瞬心配そうな表情をして、踵を返して、後ろに向かってダッシュする

それが合図になったかのように人型たちが一気に突っ込んできた。さながらバツファロー達の大移動のようだ

「あいつの邪魔は・・・させねえっ!!!」

腰だめにアサルトライフルを構えトリガーを引く。

7.62mmの銃弾が分速1000発の勢いで放たれ、先頭の集団を駆逐していった

進化（後書き）

ええと・・・毎度毎度ですが読んでくれてありがとうございます。
できれば感想や評価など入れてくれるとうれしです・・・。
あ、できれば。です図々しくてすいません・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3562f/>

A real RPG

2010年10月14日16時07分発行